

シリーズ しまねの歴史文化 1

# 出雲国風土記

ハンドブック

# 出雲国風土記の神話・説話を読む

『古事記』や『日本書紀』に匹敵するほど古く、

古代出雲についてどの歴史書よりもたくさん情報に記されている『出雲国風土記』。

誰もが知りたい、古代出雲の謎に迫るための基本文献といってもいいでしょう。

『出雲国風土記』の全体を紹介する前に、主だった神話・伝承についてみてみましょう。

## 国引き神話

### 壮大な国土創成神話 意宇郡

私たちの住んでいる国土はどのようにしてできたのだろうか？ だれもが一度は想像を巡らすであろう疑問について、『出雲国風土記』は『古事記』や『日本書紀』とは違った神話をのせています。現在、われわれが国引き神話と呼んでいる、出雲国の成り立ちを語った神話です。

#### 国引き神話のストーリー

国引き神話とは、直接は現在の松江市にあった「意宇」という地名の由来を説明した神話です。



#### 変わらぬ国土と神話の舞台

国引き神話は、実際の出雲の地勢から想像力を膨らませたスケールの大きな神話で、出雲を訪れると、だれでもその舞台を目にすることが出来ます。そして奈良時代において、出雲のような日本列島の特定の地域の成り立ちをまとめた形で記した神話は、この国引き神話が唯一なのです。

#### リズムミカルな口承文芸

『出雲国風土記』の原文は、非常にリズムミカルで躍動感に富む名文です。おそらく口づてに伝えられた神話をそのまま文章にしたのでしょう。音読して古代出雲の人々の神話世界を追体験してみましょう。

## 国引き神話 全文

意宇郡

意宇と号くる所以は、国引き坐しし八束水臣津野命の詔りたまひしく、「八雲立つ出雲の国は、狭布の堆れる国なるかも。初国小さく作れり。故作り縫わん」と詔りたまひて、「考衾志羅紀の三埼を、国の余ありやと見れば、国の余あり」と詔りたまひて、童女の胸鉤取らして、大魚の支太、鰓衝き別けて、波多須須支（幡薄）穂振り別けて、三身の綱打ち掛けて、霜黒葛間耶闇耶（繰るや繰るや）に、河船の毛會呂毛會呂に、「国来、国来」と引き来縫いたまいし国は、去豆の折絶よりして、八穂米支豆支（杵築）の御埼なり。此を以て堅め立てたまいし加志（杭）は、石見国と出雲国との堺なる、名は佐比売山、是なり。亦、持ち引きたまいし綱は、蘭の長浜、是なり。亦、「北門の佐伎の国を、国の余ありやと見れば、国の余あり」と詔りたまひて、童女の胸鉤取らして、大魚の支太衝き別けて、波多須須支穂振り別けて、三身の綱打ち掛けて、霜黒葛間耶闇耶に、河船の毛會呂毛會呂に、「国来、国来」と引き来綱ぎたまひし国は、多久の

折絶よりして、狭田の国、是なり。亦、「北門の良波の国を、国の余ありやと見れば、国の余あり」と詔りたまひて、童女の胸鉤取らして、大魚の支太衝き別けて、波多須須支穂振り別けて、三身の綱打ち掛けて、霜黒葛間耶闇耶に、河船の毛會呂毛會呂に、「国来、国来」と引き来縫いたまいし国は、宇波縫の折絶よりして、闇見の国、是なり。亦、「高志の都都の三埼を、国の余ありやと見れば、国の余あり」と詔りたまひて、童女の胸鉤取らして、大魚の支太衝き別けて、波多須須支穂振り別けて、三身の綱打ち掛けて、霜黒葛間耶闇耶に、河船の毛會呂毛會呂に、「国来、国来」と引き来縫いたまいし国は、三穂の埼なり。接ぎ引きたまいし綱は、夜見島なり。固堅め立てたまいし加志は、伯耆国なる火神岳、是なり。「今は国は引き訖わりぬ」と詔りたまひて、意宇社に御杖衝き立てて「意恵」と詔りたまひき。故意宇という。



国引き神話の綱（蘭の長浜）と杭（三瓶山）

## 恋山のワニ

(仁多郡)

出雲の山間部、仁多郡(現在の奥出雲町)に伝わる説話はたいへん短いものですが、ここにも出雲のいにしえの人々がなぜ?と思ったことが神話となって残っています。

## 恋山のあらすじ

日本海にいたワニ(サメ)が、阿伊村にいた玉日女命を慕って川をさかのぼってきたが、玉日女命は巨石で川をふさいでしまったので、ワニは玉日女命を恋うばかりで会うことができなかった。なので恋山という。

## 神話の舞台

現在、鬼の舌震(ワニの恋が詠ったもの)と呼ばれている溪谷は、さまざまな巨石と川の流れがくり出した景観地であり、この神話の舞台です。人々には、人智のおよばない神々のなせる業と感ぜられたことでしょう。そこから、その景観を説明する神話が生まれると推測できます。

## 所造天下大神

あめのしたつくらしのおおかみ

この説話の主人公、所造天下大神とはどのような神なのでしょう。その名前のとおり、天下をおつくりになった大神という意味で、オオクニヌシの神のことです。『出雲国風土記』には、オオクニヌシの神が多く登場し、その活躍が出雲のさまざまな地名の起源と結びついています。『古事記』『日本書紀』では日本の国づくりの神として登場するオオクニヌシの神ですが、出雲全域では、その土地土地に信仰が深く刻まれていたことがわかります。オオクニヌシの神の信仰圏と出雲は密接に関係しており、『出雲国風土記』は、まさに出雲の成り立ちを考えるうえで最も重要な史料の一つであるといえるでしょう。

## なぜワニか?

一見すると、海から遠く離れた奥出雲にワニ(サメ)が登場するのは不自然な気がします。しかし、中国地方の山間部では、サメは郷土料理の食材として今も食べられているのです。サメの体内には死後アンモニアが残り、腐敗しづらいため、保存技術が未発達な古代において、内陸ではサメは海の魚を代表するものだったのです。

この短い神話にも、奈良時代の生活が的確に反映されているのです。

## 風土記のつながり

この恋山に類似する伝承が、『肥前国風土記』の佐嘉郡(今の佐賀市)にもあります。こちらには嘉瀬川上流の世田姫と呼ばれる石神(巨石)に、海の神(サメ)が年に一度、川をさかのぼって会いに来るというものです。恋山の話も本来は海の神と山の神が出会う話だったのかもしれない。

## 穴道の由来

(意宇郡)

現在の松江市穴道町や穴道湖に名前を残している地名「穴道」。この地名の由来も、『出雲国風土記』に伝えられています。

## 穴道の由来

穴道郷には所造天下大神命(オオクニヌシ)が、狩りで追いかけた猪の像が、南の山に二つある。一つは周り五丈六尺(約一七メートル)、もう一つは周り四丈一尺(約一二メートル)。猪を追う犬の像もある。石となっているが猪と犬以外のなものでもない。このように猪を追いかけたさまが残ることから、当地を穴道という。

## 神秘的な猪の像

この説話は、大きくて不思議な形をした石がもとになって地名となったものです。そしてその石の由来が、神の行為として説明されているのです。

## 垣間みられる出雲の習俗と、壮大な神話体系

加賀には『出雲国風土記』の記載どおりの長大な海蝕洞窟(加賀の潜戸)があり、この不思議な造形の成り立ちも『出雲国風土記』は説明しています。説話では、母神が御子の父神について予言し、そのとおりになると、母神は窟を弓矢で貫通させるといふ偉大な力を発揮します。このように、まず誓いを立てそのとおりになるかどうかで事の善悪や正否を判断することを誓約と呼びますが、加賀神埼の説話からは、古代出雲にも同じような習俗があったことがうかがえます。

また、この神話は佐太大神の誕生の説話でもあります。佐太大神は現在の松江市鹿島町の佐太神社の祭神で、島根半島東部で広く信仰されていました。説話では「生まれた場所」としてしか登場しませんが、本来は佐太大神をめぐる壮大な神話体系があり、その一部が加賀神埼に収録されているのです。このように『出雲国風土記』からは、かつてそれぞれの地域がもっていた豊かな神話の一端を知ることができるといえます。

## 伝承

加賀神埼には窟がある。ここはいわゆる佐太大神がお産まれになった場所である。御子神がお産まれになろうとする時、弓矢がなくなった。母神である枳佐加比売命が「わたしの御子が麻須羅神の御子ならば、なくなった弓矢よ、出てきなさい」と祈願すると、最初角の弓矢が流れ出てきた。これを投げ捨てると、次に金の弓矢が流れ出てきた。そこで「暗い窟である」といって、その金の弓矢で射通しなされた。

## 加賀郷・加賀神埼の伝承

(島根郡)

島根半島には風光明媚な海岸線が続きますが、『出雲国風土記』には浜や島、あるいは岬についての詳細な記載が残されています。これは、当時の人々にとって、島根半島の沿岸部が漁業の舞台であったためと考えられ、加賀神埼と呼ばれた現在の松江市島根町の加賀の潜戸には、興味深い神話が伝えています。

# 出雲国風土記とは何か

このパンフレットで紹介する『出雲国風土記』とは、

奈良時代の天平五年（七三三）に完成した、今の島根県東部にあたる

出雲国について記した地誌（地理を紹介した本）です。

この『出雲国風土記』にはどんな価値や特色、魅力があるのでしょうか。

## 古事記・日本書紀と並ぶ

## 古代出雲の詳細な記録

今から約一三〇〇年前の奈良時代、和銅六年（七二二）に、全国六〇余りあったそれぞれの国に対して、その地方の地名の由来、特産物、古老の伝承などを調査、報告するよう命令が出されました。この命令に従って出雲国で編さんされたのが『出雲国風土記』で、命令の二〇年後、天平五年（七三三）二月三〇日に完成しました。日本で記された古い書物には『古事記』（七二二年完成）や『日本書紀』（七二〇年完成）がありますが、それらに匹敵するほどの古い書物が『出雲国風土記』を含む諸国の風土記なのです。また、当時の政治の中心、近畿地方の貴族の手によって編

さんされた『古事記』や『日本書紀』とは異なり、風土記は各国の現地で編さんされました。このため、風土記には『古事記』や『日本書紀』には記されていない地方の情報が、詳細に記録されています。

## 失われた風土記

各国で編さんされた風土記も、平安時代にはすでに失われてしまったようです。そして、現在まで残っているのは『出雲国風土記』と、常陸国（今の茨城県）・播磨国（兵庫県西南部）・豊後国（大分県の大分・肥前国（佐賀県・壱岐と対馬を除く長崎県）の五か国の風土記だけです。このうち、出雲以外の四か国の風土記には脱落した部分があったり、現在に伝わるものが省略本であったりするなどしており、『出雲国風

土記』だけが全国で唯一ほぼ完全な形で残っているといえるのです。

## 出雲国造による編さん

また『出雲国風土記』には、ほかの風土記にはない特色があります。それは、編さん者が、都から派遣された役人である国司ではなく、出雲の豪族、出雲国造出雲臣広島という人物であることです。風土記は現地で編さんされたのですが、『出雲国風土記』については、とりわけ地元出雲からの視点が多く盛り込まれています。このように、地方の視点から記述された奈良時代の書物はほかになく、『出雲国風土記』はかけがえのない価値を有しているのです。



## 都・朝廷

### 〈風土記撰進の命令の内容〉

- 一、地名に好ましい漢字を用いなさい
- 一、物産品目を報告しなさい
- 一、土地の肥え具合を報告しなさい
- 一、山川原野の名と、その由来を報告しなさい
- 一、古老が伝える土地の伝承を報告しなさい

## 諸国

713年  
編さん  
命令

撰上

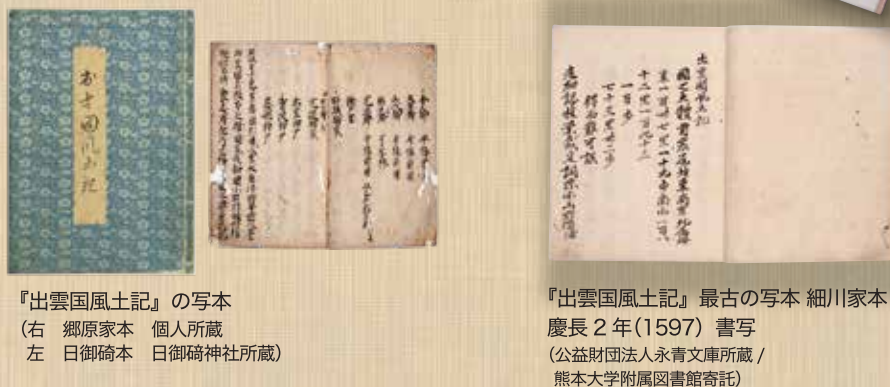
『出雲国風土記』の完成は天平五年（733）で、唯一完成した年が正確にわかっています。

常陸：715～723年頃  
播磨：715～717年頃（未撰上か）  
豊後：732～739年頃  
肥前：732～739年頃

## 風土記編さんの経緯

## 現存する五風土記

## 『出雲国風土記』の写本



『出雲国風土記』の写本  
（右 郷原家本 個人所蔵  
左 日御碕本 日御碕神社所蔵）

『出雲国風土記』最古の写本 細川家本  
慶長2年（1597）書写  
（公益財団法人永青文庫所蔵/  
熊本大学附属図書館寄託）

『出雲国風土記』の原本は失われており、現在は写本の形でその内容が伝えられています。最古の写本である細川家本や日御碕神社所蔵の写本（日御碕本）が有名です。

# 出雲国風土記 地図





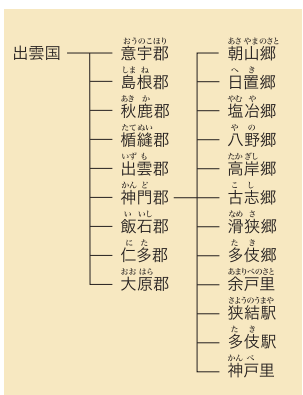
# 風土記に記された古代の出雲国

『出雲国風土記』の特色は、記載が整っていて、実際に計測した数値が多く書かれていることです。そして、登場する場所には郡の役所からの方角や距離も記されているので、当時の出雲国全体の様子が手に取るようにわかります。

## 出雲国の行政区分

奈良時代、全国は六〇余りの国に分割されていました。今の島根県東部、出雲国もその一つです。出雲国はさらに九つの郡からなり、郡はそれぞれ四〜一の郷などから

国・郡・郷の構成  
例は神門郡(今の出雲市西部)



構成されていました。『出雲国風土記』には、このすべての郡・郷の名前と由来、そして所在地が記されています。奈良時代の国名はすべてわかっていますが、各国の郡の名前やその下の郷の名前がすべてわかっていて、さらにその場所が特定できるのは、出雲国だけなのです。そして、この時につけられていた地名は、その多くが現在でも使われています。

## 発掘された郡家

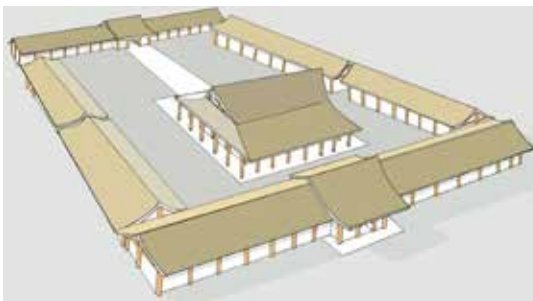
『出雲国風土記』は一冊の書物ですが、

## 国内をむすぶ交通路 道路・駅・渡、割

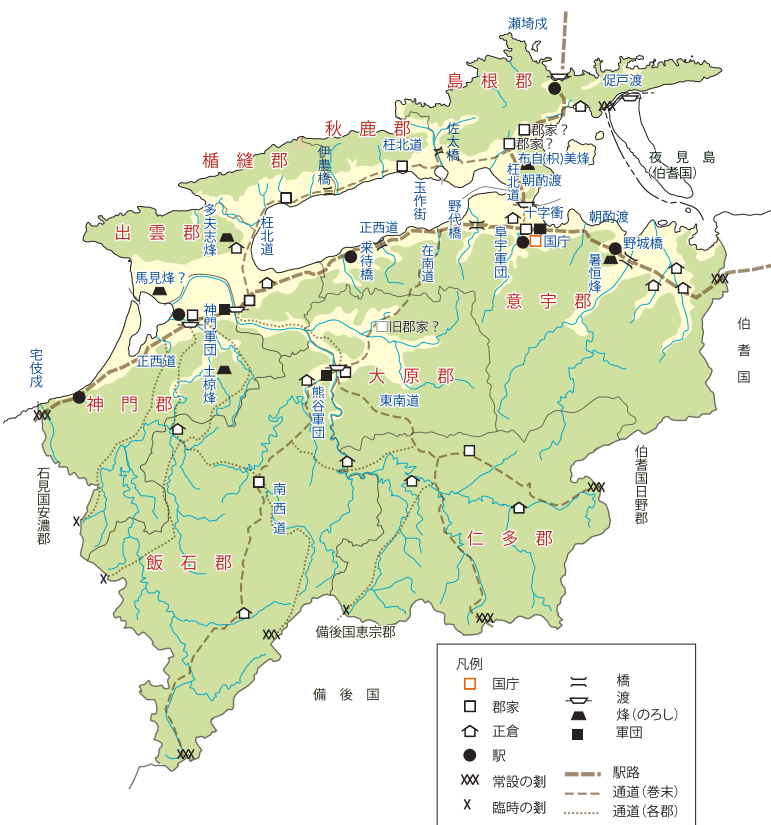
詳細な道路の記載があるのも、『出雲国風土記』の特徴です。山陰道と呼ばれる都から石見国(島根県西部)・隠岐国までをつなぐ古代道路(駅路)について、国内の道のりと、駅路に置かれた通信や宿泊の施設である駅の所在地、また、橋や渡船についても『出雲国風土記』には記載されています。さらに、駅路以外にも、郡家を連結する通道と呼ばれる国内の道路、さらには国境に置かれた割(関所)の記載もあります。これらは、奈良時代の文献としては『出雲国風土記』にしかみえないものです。

従来、奈良時代の道路は細く曲がりくねっていたと考えられてきましたが、近年、全国で大規模な直線道路が発掘され、道路がしっかりと整備されていたことがわかってきました。『出雲国風土記』にみえる道路網はこのような奈良時代

の道路政策・道路整備を明確に記述したものでした。出雲国内でも、尾根上を約一キロメートルにわたり縦走する幅九メートルの道路遺構などが、古代の山陰道として想定されるルート上で発掘されています。



神門郡家の中心部復元図(出雲市古志本郷遺跡)



『出雲国風土記』に記載のある施設と交通路

発掘された出雲国山陰道跡(出雲市)  
写真提供: 出雲弥生の森博物館



# 豊かな自然と産物 人々の暮らし

『出雲国風土記』には山野・河川・池堤・浜や島などが約三四〇登場します。

山については郡家からの方角と距離が記され、川については水源となる山が、

また海岸の地形は、郡の東から西へ、というように書かれています。

そして、多くの地名が現在も残っており、今のどこにあたるのか推定されています。

## 風土記の山

『出雲国風土記』には約九〇の山の記載があり、それぞれに特徴がありますが、ここでは桶縫郡の神名樋山（現在の出雲市多久町の大船山）を取り上げてみます。

「峰の西に石神がある。高さ一丈、周り一大である。道の傍らには小さい石神が百余りある。古老が伝えていうには、アヂスキタカヒコの命の後であるアミノミカヂヒメの命が多忠の村までいらつしやつて、タキツヒコの命をお産みになった。そのときお腹の中のタキツヒコの命に教えて「これか

らおまえを生もうとするのにここがふさわしい」とおつしやつた。石神はタキツヒコの命の依代だ。雨乞いをするとき必ず雨を降らせてくれる」

現在も大船山にはこの石神に推定されている大岩や小さい石神と思われる石群が存在し、また近くにはタキツヒコをお祭りしている滝もあり、古代の信仰の姿を垣間みることができます。

## 土地開発の物語

また、秋鹿郡惠曇浜には次のような土地を開発した話もみえます。

「惠曇浜。（中略）ここに磐壁を彫り抜いたところが二か所ある。一か所は厚さは三丈、広さは一丈、高さは八尺ある。もう一か所は厚さは二丈二尺、広さは一丈、高さは一丈ある。（中略）古老が伝えていうことには、島根郡の大領、社部臣訓麻呂の先祖の波蘇たちが稲田の漕（よどみ）を取り除くために掘り抜いたものである。」

この磐壁は現在の松江市鹿島町惠曇にある佐陀川の岩壁と考えられます。その後の拡幅によって、風土記当時とは異なっています。が、古代人の開発の様子をうかがわせます。

## 風土記時代の産物

『出雲国風土記』には、政府から出された命令どおり、土地の産物の報告もなされています。登場する産物は、山野の植物が約一一〇種類、動物が約六〇種類にもおよびます。植物については薬草が多く、出雲の特色だったのではないかと考えられ、平安時代になると出雲国造出雲臣と同じ出雲を名のる氏族から、有名な医師が輩出されています。

## さまざまな産業

『出雲国風土記』意宇郡の忌部神戸（現在の松江市東忌部町・西忌部町・玉湯町など）では、「御



クロマゴロ：『出雲国風土記』に志昆魚としてみえる



シラン：『出雲国風土記』に白葱（白菰）としてみえる地下茎は生薬になる



奈良時代に出雲でつくられた玉

沐の忌玉」と記される玉をつくっていたことが記されています。発掘調査によって、実際に忌部神戸の推定地で奈良時代の玉作の遺跡が確認されています。このほか焼き物の産地、製鉄を行った地域や砂鉄の採取場所なども記されています。

奈良時代の地方の産業について、国内のどこで行われたかを明記する文献は少なく、『出雲国風土記』は当時の産業を知るうえで、とても重要です。

## 人々が出会う場

島根郡の邑美冷水（現在の松江市大海崎町）にも注目すべき記事がみえます。



邑美冷水での歌垣風景復元模型



桶縫郡の神名樋山（出雲市大船山）

# 出雲国風土記をつくった人々

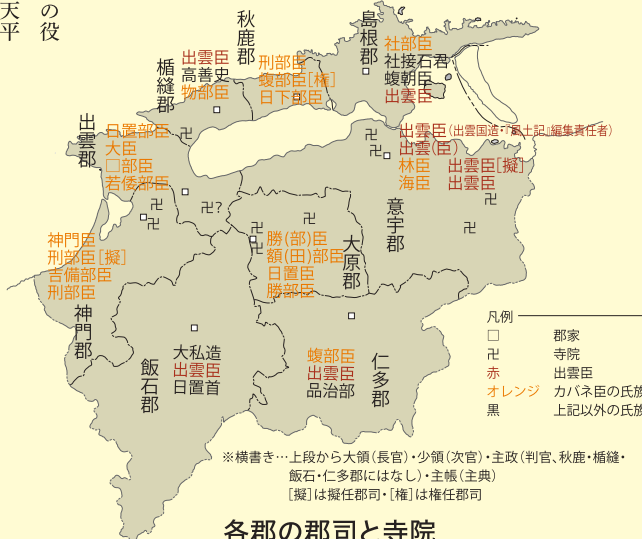
いすもこくそう いすも おみ  
出雲国造 出雲臣

『出雲国風土記』を編さんした出雲国造出雲臣とはどのような人物だったのでしょうか。国造というのは、奈良時代以前、六〜七世紀にかけて地方に置かれた役職の一つで、その地域を取りまとめる豪族でした。六四五年の大化改新以後の政治改革のなかで、国造は名誉職になり、地方支配は中央から派遣された国司の役目になります。そのなかで、出雲国の出雲国造は、奈良時代になっても、地元の豪族たちの集団のなかで一定の権威を有していたと考えられて

『出雲国風土記』(古代文化センター本)  
巻末の国造署名

風土記を構成する各郡の最後には、郡の役人である郡司のウジ名が記されており、天平五年(七三三)における出雲国九郡の郡司であった氏族がわかります。これを見ると、出雲国造出雲臣の本拠地である意宇郡では六人のうち四人が出雲臣で、そのほかの四郡にも出雲臣がみえます。また、当時の有力者はウジの下にカバネと呼ばれる称号をもっていました。出雲国内の郡司の多くは出雲国

## 出雲国の郡司たち



各郡の郡司と寺院

## 出雲国の寺院と神社



## 郡司たちが建てた寺

『出雲国風土記』には、新造院と呼ばれた寺院についての記載もあります。それぞれの寺院について、「五重塔がある」とか「僧が一人いる」というような寺院の内容と、その寺院を建立した豪族多くはその郡の郡司が記されています。

奈良時代には全国的に多数の寺院が建立されたことがわかっていますが、だれが建立したのか、僧がいたのかなどがわかる寺院は極めてまれです。土地の有力者である郡司が地方寺院の主たる建立者である」という通説の根拠の一つは、『出雲国風土記』にあるのです。

## 出雲国の神社

もう一つ、国内の神社が網羅的に記載されているのも『出雲国風土記』の特筆すべき点です。これは、たとえ全国風土記が残っていたとしても

ても、『出雲国風土記』に特徴的な項目だったことが想定されます。

全国の神社がいつ成立したかについては不明な点が多いのですが、少なくとも官社と呼ばれ、国家に認定される神社は全国的にみると八世紀以降九世紀にかけて次第に増えていったと考えられています。そのなかで出雲国だけは、『出雲国風土記』の記された七三三年に、ほとんどすべての官社が登録を終了して、その数もとても多いのです(一八四社)。出雲は奈良時代から神々の国であったといえそうです。

さらに、出雲国内では出雲郡を中心に、奈良時代の神社ではないかと思われる遺跡が調査されています。また、風土記を読むと、当時杵築大社と呼ばれた出雲大社は、現在と同様の巨大な本殿をもつ神社群であったことが推定できます。全国的にみても早くに確立した出雲国の神社。この謎を解く鍵も『出雲国風土記』が握っているのです。



発掘された奈良時代の神社復元模型(出雲市青木遺跡)  
出雲郡の神社、伊努社・美談社・県社などに推定される

## 風土記を学ぶ

出雲国風土記全体について本文を掲載し、解説した本には、以下のようなものがあります。

- ・加藤義成 校注『出雲国風土記』  
松江今井書店
- ・荻原千鶴 全訳注『出雲国風土記』講談社
- ・島根県古代文化センター編  
『解説 出雲国風土記』今井出版
- ・島根県古代文化センター編  
『出雲国風土記』島根県教育委員会

## 風土記を訪ねる

[出雲国風土記の内容を紹介した博物館]

- ・島根県立古代出雲歴史博物館  
出雲市大社町杵築東99-4 電話 0853(53)8600
- ・島根県立八雲立つ風土記の丘展示学習館  
松江市大庭町 456 電話 0852(23)2485

[出雲国風土記登場地について]

風土記に登場する県内約130か所に  
ついて、案内の標柱を設置しています。



マップonしまね(下記の二次元コード)の観光・景観・文化財から出雲国風土記登場地を選択すると、地図上で風土記登場地を確認できます。



シリーズ しまねの歴史文化1  
出雲国風土記ハンドブック

平成26年3月発行  
令和8年9月改訂

発行 島根県教育委員会  
編集 島根県古代文化センター  
〒690-8502 島根県松江市殿町1  
電話0852(22)6727